

# 花はくれない

——高齡者文学人生論

佐藤紅緑 (1974-1949)

『あゝ玉杯に花うけて』(2009)

佐藤愛子 (1923- )

『花はくれない 小説佐藤紅緑』(1971) 「講談社」

『血脈』(2001) 「文藝春秋」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀  
仏・・・・・・・・

正宗白鳥はアーメンとなえて死んだと言われているが、その一方で、ナムアミダブツとなえて往生した日本人作家に誰がいるだろうか。

日本は仏教国とされているので、すぐに見つかるだろうと思っていたが、案外ないものだ。いろいろ探したあげく、やっと佐藤紅緑（洽六）の事例を発見した。佐藤愛子『花くれない 小説佐藤紅緑』の描写は次の通り。

ある日、父は私と母に向つて起してくれと  
いった。私と母が左右から支え起すと、父は  
静かに手を組み合せた。そうして伸びた白い  
口髭の下から、低いがはつきりした声がこう  
繰り返すのが聞こえた。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

——」  
『血脈』にも似たような描写がある。紅緑は仏教嫌いだっただというが、それでもいよいよ死を前にすると、南無阿弥陀仏をとなえたのだ、紅緑でさえそうなら、やはり日本人の無意識の底には仏への信仰心が潜んでいるような気もする。

佐藤紅緑、享年七十五。そのまま息をひきとれば、高僧の大往生のようだが、実際にはその後、「うんこ」と一言いつてから 愛子の入れた差し



## 花はくれない

高齢者文学人生論

込み便器で排便し、「紙」といって自分で始末したという。どれほど眠ったか。夜が明けて、妻と娘が眼を覚ましたときはすでに息がたえていた。したがって、最後の一言は「紙」である。

紅緑は青森県弘前出身。郷土の先輩陸羯南（くがかつなん）の書生となり、日本新聞社では正岡子規と机を並べた。子規には俳句の才能を認められ、高浜虚子、河東碧梧桐、石井露月とともに四天王と称された。

しかし、紅緑は俳句に甘んじることができず、政治家を志したり、小説や脚本を書いたりした。特に貧しい家庭の少年が正義と勇気と友情と誇を失わずに希望を持って生きていく『あゝ玉杯に花うけて』などの少年熱血小説で知られている。

紅緑の小説を読んで励まされた少年は多いが、自分の息子は妾腹の大垣肇をのぞき不良少年ばかりだった。その原因は女道楽で、特定の妾のほか、芸者、三味線ひき、芝居茶屋の女中、寄席のお茶子など、手当たり次第、関係をもった。

紅緑が人力車で妾の家へ行く姿を見かけ、「俺も一生に一度ぐらい、ああいうことをしてみたいよ」と夏目漱石が云ったことがあるという。

男子六人、女子七人の子宝に恵まれ、そのうち名のある作家だけでもサトウハロロー、大垣肇、佐藤愛子と三人もいるのにこんな句を遺している。

三児ありて二児は戦死す老の秋 紅緑